

目的 健康で快適な衣服を追求すべく演者らは久しく着衣調査を進めてきたが、それらの結果から、約20年前（1968～1969年）と今回（1986～1987年）の比較に於て、衣服重量の軽量化、着用枚数の減少、および耐寒耐暑が劣ってきているのではないかとの推論を得た。（第1～3報参照。）そこで、実際に女子大学生が着用している衣服の両者間にどのような差違が存在するかを検討する必要を痛感し、今回、夏季における着用服種を検討し、標準的着用衣服においての衣服保温力を測定した。若干の成績を得たので報告する。

方法 調査は京阪神に居住する健康な女子大学生（18～19才）を対象とし、1968～1969年 121名、1986～1987年 125名について、毎月中旬に調査用紙を配布し、記入せしめた。その結果から、6、7、8各月の標準的着用衣服の組合わせと出現する服種の緒元（重量、デザイン、材質）を求め、それにより供試衣服を作成した。衣服保温力の測定にはサーマルマネキンを用い、供試衣服を順次着用せしめ、夏季の環境温熱条件下（無風時）における保温力（clo値）の比較測定を行った。

結果 1986年度は1968年度に比し、着用衣服の平均重量が、6月は413.6から357.9 g/m²、7月は381.4から341.3 g/m²に減少を示すが、衣服断熱力は、0.328から0.398 clo、0.429から0.467 cloと増加を示す。従って、6、7月においては耐暑の衰えは断言できない。8月は、衣服重量については343.3から276.8 g/m²、衣服断熱力は0.288から0.217 cloにいずれも減少を示す。従って、8月は衣服断熱力の低下にもかかわらず寒暑感覚点数は増加（第1報）しており、耐暑の衰えが認められる。これらを更に検討し報告する。